



平の映画界 (日掲載)

シナレテ

襖はくさるゝ(二)

司馬英児

28、二人の男の行つた方
 29、カメラ、山を昇り、
 左横に回しながら次第に
 背景に移る(この景、秋
 夏、春の順に変化して行
 ば前良し)

30、一寸した街道に面し
 竹藪のあはら家、後方は
 竹藪の間に立つてゐる
 31、荒壁の欄に列べられ
 た、どりの佛像(未完
 成の物や古物などもまじ
 る)カメラ移動して、往
 来へ向つて掛けられた、目
 の荒い顔を入れて、籠
 籠に住居が見えて、咲きほ
 こつて居る櫻の枝なども見
 られ、村八通、

32、前景から、カメラ後
 退して、左に腰を下して若
 者ど、仕事場に佛像をまじ
 るで、老人を入れて止ま
 る。……と若者顔老
 人の方へ向けて、
 Tのさき春の句が……
 来り、
 今年の春も

33(左様)と仕事に氣を入
 れ、迷惑するに答へ
 老(春の日にらしく
 少)は以下同じく
 34、つまたの返事によつ
 て往來をながめて居
 る若者
 35、竹藪の日にさした小鳥
 の動影
 36、はら／＼散る櫻
 37、遠がすみの湖
 38、屋根越の柳
 39、ゆる／＼する柳の枝
 チラシについて
 「平館のチラシは例によ
 キレイな寫眞入りである
 が、少しの變化はあつても
 ない、平凡だ、獨創的な
 風はないか、獨創的な
 ものがないか、
 「有聲座」の毎度のチラシ
 にはあれ、居る、ついで
 の間の(繪日傘)の第一、二
 話上映の時、用いた、チラ
 シ、紙張小唄の樂壇の上
 に、ついで、あ、み、に、
 字の配列に少しも整ひのな
 い、

「別府鎮水」
 「温泉エキス」
 (アンマイラズ)
 山野遊樂局
 高病の靈藥
 「別府鎮水」
 「温泉エキス」
 (アンマイラズ)
 山野遊樂局

休刊大登日第一第二日
 定 價 一冊六十銭 五冊
 廣告料 寄付本館指定郵便
 印刷所 磐城新聞社
 發行所 磐城新聞社

軍備會議がどうにかに終
 へた頃……各社の戦争
 平で續々と映と来た、その
 故初が……「草に祈る」
 「變化六女部」(神田の火
 祭)……有聲座と映中

この欄への投書はカ
 ンゲイします。なん
 のキライもありませ
 ん、諸兄の活躍にた
 まかせします。

明日 四月 五月
 吉 凶 暦 十月 八月
 一白の人、小成に安んじ
 る、持て持心の乏しき日
 あり、三三の人、小利に
 注意せざれば愛を失す、
 あり、三三の人、小利に
 注意せざれば愛を失す、
 あり、三三の人、小利に
 注意せざれば愛を失す、

「別府鎮水」
 「温泉エキス」
 (アンマイラズ)
 山野遊樂局

近代の女子は一般に依
 心持つ者が多いやうな
 幼くして親に離れ、嫁
 しては夫に離れ、老いば子
 に離れ、いよいよ三途の
 の如く女子は鬼角他に絶
 無があるの概して獨立心
 に乏しく、自分の意思で生
 活すべきこともよく考へ、
 いで他からの助力を藉り受
 るやうしてゐる、即ち女子
 には確乎たる我れといふも
 のなく、丁度浮草のやうに
 風のまにまに漂ふやうな客
 受を受けることばかり。つま
 り、
 自信自重のよわさがため
 遂に心の本城、乗れられ
 てしまふのである。然らば
 よいかといへば、先づ誘惑
 ないやうにするは勿論心
 縮こまりをつけ、何時も
 注意を怠らぬ、それは細
 こころが、念に念を入れ、
 若へ、茲が我慢のしどころ
 と思つたらじつとこらへ、
 りればならぬ。それには修
 養が大切である。西洋の詩
 人も一臆も物と汝のまたの
 名は女なり」といつてゐ
 る。或人が額髪を出して
 肩掛をしてゐればまた真似
 行で我れなき證據である
 自信あるのは決して人の
 真似はしない
 水 面 を 流 る 泡 の
 やうでは到底自信は持て
 女は多く我れを支ふる
 確なる立脚地がなく世潮に
 押流れ外物に支配されなが
 ら過ぎ行く近代女性の將來
 を危まれるものである

「誘惑に克つ心」
 研町 浅井喜代子
 近代の女子は一般に依
 心持つ者が多いやうな
 幼くして親に離れ、嫁
 しては夫に離れ、老いば子
 に離れ、いよいよ三途の
 の如く女子は鬼角他に絶
 無があるの概して獨立心
 に乏しく、自分の意思で生
 活すべきこともよく考へ、
 いで他からの助力を藉り受
 るやうしてゐる、即ち女子
 には確乎たる我れといふも
 のなく、丁度浮草のやうに
 風のまにまに漂ふやうな客
 受を受けることばかり。つま
 り、
 自信自重のよわさがため
 遂に心の本城、乗れられ
 てしまふのである。然らば
 よいかといへば、先づ誘惑
 ないやうにするは勿論心
 縮こまりをつけ、何時も
 注意を怠らぬ、それは細
 こころが、念に念を入れ、
 若へ、茲が我慢のしどころ
 と思つたらじつとこらへ、
 りればならぬ。それには修
 養が大切である。西洋の詩
 人も一臆も物と汝のまたの
 名は女なり」といつてゐ
 る。或人が額髪を出して
 肩掛をしてゐればまた真似
 行で我れなき證據である
 自信あるのは決して人の
 真似はしない
 水 面 を 流 る 泡 の
 やうでは到底自信は持て
 女は多く我れを支ふる
 確なる立脚地がなく世潮に
 押流れ外物に支配されなが
 ら過ぎ行く近代女性の將來
 を危まれるものである

「誘惑に克つ心」
 研町 浅井喜代子
 近代の女子は一般に依
 心持つ者が多いやうな
 幼くして親に離れ、嫁
 しては夫に離れ、老いば子
 に離れ、いよいよ三途の
 の如く女子は鬼角他に絶
 無があるの概して獨立心
 に乏しく、自分の意思で生
 活すべきこともよく考へ、
 いで他からの助力を藉り受
 るやうしてゐる、即ち女子
 には確乎たる我れといふも
 のなく、丁度浮草のやうに
 風のまにまに漂ふやうな客
 受を受けることばかり。つま
 り、
 自信自重のよわさがため
 遂に心の本城、乗れられ
 てしまふのである。然らば
 よいかといへば、先づ誘惑
 ないやうにするは勿論心
 縮こまりをつけ、何時も
 注意を怠らぬ、それは細
 こころが、念に念を入れ、
 若へ、茲が我慢のしどころ
 と思つたらじつとこらへ、
 りればならぬ。それには修
 養が大切である。西洋の詩
 人も一臆も物と汝のまたの
 名は女なり」といつてゐ
 る。或人が額髪を出して
 肩掛をしてゐればまた真似
 行で我れなき證據である
 自信あるのは決して人の
 真似はしない
 水 面 を 流 る 泡 の
 やうでは到底自信は持て
 女は多く我れを支ふる
 確なる立脚地がなく世潮に
 押流れ外物に支配されなが
 ら過ぎ行く近代女性の將來
 を危まれるものである

「誘惑に克つ心」
 研町 浅井喜代子
 近代の女子は一般に依
 心持つ者が多いやうな
 幼くして親に離れ、嫁
 しては夫に離れ、老いば子
 に離れ、いよいよ三途の
 の如く女子は鬼角他に絶
 無があるの概して獨立心
 に乏しく、自分の意思で生
 活すべきこともよく考へ、
 いで他からの助力を藉り受
 るやうしてゐる、即ち女子
 には確乎たる我れといふも
 のなく、丁度浮草のやうに
 風のまにまに漂ふやうな客
 受を受けることばかり。つま
 り、
 自信自重のよわさがため
 遂に心の本城、乗れられ
 てしまふのである。然らば
 よいかといへば、先づ誘惑
 ないやうにするは勿論心
 縮こまりをつけ、何時も
 注意を怠らぬ、それは細
 こころが、念に念を入れ、
 若へ、茲が我慢のしどころ
 と思つたらじつとこらへ、
 りればならぬ。それには修
 養が大切である。西洋の詩
 人も一臆も物と汝のまたの
 名は女なり」といつてゐ
 る。或人が額髪を出して
 肩掛をしてゐればまた真似
 行で我れなき證據である
 自信あるのは決して人の
 真似はしない
 水 面 を 流 る 泡 の
 やうでは到底自信は持て
 女は多く我れを支ふる
 確なる立脚地がなく世潮に
 押流れ外物に支配されなが
 ら過ぎ行く近代女性の將來
 を危まれるものである

「誘惑に克つ心」
 研町 浅井喜代子
 近代の女子は一般に依
 心持つ者が多いやうな
 幼くして親に離れ、嫁
 しては夫に離れ、老いば子
 に離れ、いよいよ三途の
 の如く女子は鬼角他に絶
 無があるの概して獨立心
 に乏しく、自分の意思で生
 活すべきこともよく考へ、
 いで他からの助力を藉り受
 るやうしてゐる、即ち女子
 には確乎たる我れといふも
 のなく、丁度浮草のやうに
 風のまにまに漂ふやうな客
 受を受けることばかり。つま
 り、
 自信自重のよわさがため
 遂に心の本城、乗れられ
 てしまふのである。然らば
 よいかといへば、先づ誘惑
 ないやうにするは勿論心
 縮こまりをつけ、何時も
 注意を怠らぬ、それは細
 こころが、念に念を入れ、
 若へ、茲が我慢のしどころ
 と思つたらじつとこらへ、
 りればならぬ。それには修
 養が大切である。西洋の詩
 人も一臆も物と汝のまたの
 名は女なり」といつてゐ
 る。或人が額髪を出して
 肩掛をしてゐればまた真似
 行で我れなき證據である
 自信あるのは決して人の
 真似はしない
 水 面 を 流 る 泡 の
 やうでは到底自信は持て
 女は多く我れを支ふる
 確なる立脚地がなく世潮に
 押流れ外物に支配されなが
 ら過ぎ行く近代女性の將來
 を危まれるものである

「誘惑に克つ心」
 研町 浅井喜代子
 近代の女子は一般に依
 心持つ者が多いやうな
 幼くして親に離れ、嫁
 しては夫に離れ、老いば子
 に離れ、いよいよ三途の
 の如く女子は鬼角他に絶
 無があるの概して獨立心
 に乏しく、自分の意思で生
 活すべきこともよく考へ、
 いで他からの助力を藉り受
 るやうしてゐる、即ち女子
 には確乎たる我れといふも
 のなく、丁度浮草のやうに
 風のまにまに漂ふやうな客
 受を受けることばかり。つま
 り、
 自信自重のよわさがため
 遂に心の本城、乗れられ
 てしまふのである。然らば
 よいかといへば、先づ誘惑
 ないやうにするは勿論心
 縮こまりをつけ、何時も
 注意を怠らぬ、それは細
 こころが、念に念を入れ、
 若へ、茲が我慢のしどころ
 と思つたらじつとこらへ、
 りればならぬ。それには修
 養が大切である。西洋の詩
 人も一臆も物と汝のまたの
 名は女なり」といつてゐ
 る。或人が額髪を出して
 肩掛をしてゐればまた真似
 行で我れなき證據である
 自信あるのは決して人の
 真似はしない
 水 面 を 流 る 泡 の
 やうでは到底自信は持て
 女は多く我れを支ふる
 確なる立脚地がなく世潮に
 押流れ外物に支配されなが
 ら過ぎ行く近代女性の將來
 を危まれるものである

「誘惑に克つ心」
 研町 浅井喜代子
 近代の女子は一般に依
 心持つ者が多いやうな
 幼くして親に離れ、嫁
 しては夫に離れ、老いば子
 に離れ、いよいよ三途の
 の如く女子は鬼角他に絶
 無があるの概して獨立心
 に乏しく、自分の意思で生
 活すべきこともよく考へ、
 いで他からの助力を藉り受
 るやうしてゐる、即ち女子
 には確乎たる我れといふも
 のなく、丁度浮草のやうに
 風のまにまに漂ふやうな客
 受を受けることばかり。つま
 り、
 自信自重のよわさがため
 遂に心の本城、乗れられ
 てしまふのである。然らば
 よいかといへば、先づ誘惑
 ないやうにするは勿論心
 縮こまりをつけ、何時も
 注意を怠らぬ、それは細
 こころが、念に念を入れ、
 若へ、茲が我慢のしどころ
 と思つたらじつとこらへ、
 りればならぬ。それには修
 養が大切である。西洋の詩
 人も一臆も物と汝のまたの
 名は女なり」といつてゐ
 る。或人が額髪を出して
 肩掛をしてゐればまた真似
 行で我れなき證據である
 自信あるのは決して人の
 真似はしない
 水 面 を 流 る 泡 の
 やうでは到底自信は持て
 女は多く我れを支ふる
 確なる立脚地がなく世潮に
 押流れ外物に支配されなが
 ら過ぎ行く近代女性の將來
 を危まれるものである

「誘惑に克つ心」
 研町 浅井喜代子
 近代の女子は一般に依
 心持つ者が多いやうな
 幼くして親に離れ、嫁
 しては夫に離れ、老いば子
 に離れ、いよいよ三途の
 の如く女子は鬼角他に絶
 無があるの概して獨立心
 に乏しく、自分の意思で生
 活すべきこともよく考へ、
 いで他からの助力を藉り受
 るやうしてゐる、即ち女子
 には確乎たる我れといふも
 のなく、丁度浮草のやうに
 風のまにまに漂ふやうな客
 受を受けることばかり。つま
 り、
 自信自重のよわさがため
 遂に心の本城、乗れられ
 てしまふのである。然らば
 よいかといへば、先づ誘惑
 ないやうにするは勿論心
 縮こまりをつけ、何時も
 注意を怠らぬ、それは細
 こころが、念に念を入れ、
 若へ、茲が我慢のしどころ
 と思つたらじつとこらへ、
 りればならぬ。それには修
 養が大切である。西洋の詩
 人も一臆も物と汝のまたの
 名は女なり」といつてゐ
 る。或人が額髪を出して
 肩掛をしてゐればまた真似
 行で我れなき證據である
 自信あるのは決して人の
 真似はしない
 水 面 を 流 る 泡 の
 やうでは到底自信は持て
 女は多く我れを支ふる
 確なる立脚地がなく世潮に
 押流れ外物に支配されなが
 ら過ぎ行く近代女性の將來
 を危まれるものである

「誘惑に克つ心」
 研町 浅井喜代子
 近代の女子は一般に依
 心持つ者が多いやうな
 幼くして親に離れ、嫁
 しては夫に離れ、老いば子
 に離れ、いよいよ三途の
 の如く女子は鬼角他に絶
 無があるの概して獨立心
 に乏しく、自分の意思で生
 活すべきこともよく考へ、
 いで他からの助力を藉り受
 るやうしてゐる、即ち女子
 には確乎たる我れといふも
 のなく、丁度浮草のやうに
 風のまにまに漂ふやうな客
 受を受けることばかり。つま
 り、
 自信自重のよわさがため
 遂に心の本城、乗れられ
 てしまふのである。然らば
 よいかといへば、先づ誘惑
 ないやうにするは勿論心
 縮こまりをつけ、何時も
 注意を怠らぬ、それは細
 こころが、念に念を入れ、
 若へ、茲が我慢のしどころ
 と思つたらじつとこらへ、
 りればならぬ。それには修
 養が大切である。西洋の詩
 人も一臆も物と汝のまたの
 名は女なり」といつてゐ
 る。或人が額髪を出して
 肩掛をしてゐればまた真似
 行で我れなき證據である
 自信あるのは決して人の
 真似はしない
 水 面 を 流 る 泡 の
 やうでは到底自信は持て
 女は多く我れを支ふる
 確なる立脚地がなく世潮に
 押流れ外物に支配されなが
 ら過ぎ行く近代女性の將來
 を危まれるものである

「誘惑に克つ心」
 研町 浅井喜代子
 近代の女子は一般に依
 心持つ者が多いやうな
 幼くして親に離れ、嫁
 しては夫に離れ、老いば子
 に離れ、いよいよ三途の
 の如く女子は鬼角他に絶
 無があるの概して獨立心
 に乏しく、自分の意思で生
 活すべきこともよく考へ、
 いで他からの助力を藉り受
 るやうしてゐる、即ち女子
 には確乎たる我れといふも
 のなく、丁度浮草のやうに

